

見鬼としての羅聘

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構
 北九州市八幡西区自由ヶ丘二二(千八〇七―八五八六)
 (二〇二六年六月二日受付、二〇二六年七月二十八日受理)

はじめに

羅聘(一七三三―一七九九)字は遯夫、号、両峰、別号、花之寺僧、は揚州の八怪の一人であり、師である金冬心とともに、中国絵画史上有名な人物であることはいうまでもないであろう。羅聘の絵画は現在でも多く残されているが、特に代表作ともいえる「鬼趣図」は、当時多くの人士より賞賛された。現在寓目する所の「鬼趣図」は、香港の霍宝材氏藏の八枚である。題名の示すように霊の世界を描いたもので、絵画としては不思議な絵であり、ある意味滑稽で奇妙なものであるが、日本の幽霊画の如く徒に人の心胆を寒からしめることを、意図しているようなものとは考えられない。そこで後世「鬼趣図」は社会を風刺した絵画と捉える説も提唱されている。

従来羅聘は画家としての作品、才能を論じられる場合がほとんどであり、羅聘生存当時から、人口に膾炙され、また同時期の多くの清代の志怪書に記されている羅聘の見鬼としての能力を論じ

た論考は少ないといえる。日本で最も早く羅聘の見鬼としての能力を論じたものに、澤田瑞穂氏の『中国の呪術』がある。その冒頭に「見鬼考」という論考があり、第六章には「浄眼羅両峰」というように、羅聘のために一章設けている。これを見ると、氏は当時の志怪書・随筆等より、羅聘の見鬼としての能力が記された部分を列挙しており、多くの人士が羅聘のこのような能力に興味を示し、且つ話題にしていたかが理解できる。

澤田氏の「見鬼考」は中国古代より清に至るまでの、所謂「見鬼史」ともいえるべき内容であり、夥しい数の見鬼が存在してきたことを示している。その中で羅聘が他の見鬼と一線を画しているのは、見鬼でありながら一流の画家であった点であり、尚且つ教養もあり、著作等が存在していることであろう。見鬼としてこのような例は稀有といえる。

そこで本稿では羅聘の見鬼としての能力と思想を、清代の志怪書や前述の「鬼趣図」、また羅聘自身の著書である『香葉草堂詩存』、『我信録』等の一部を取り上げ考察していく。

一、羅聘の見鬼としての能力

羅聘の見鬼としての能力は、呉錫麒の「羅兩峰墓志銘」(以下墓志銘と表記)の文言に次のように記されている。

眼に慧光に有り、鬼物の地下に煩冤にするを洞知す。變相の圖を開き、美山の阿有り、離騷の狀を寫す。製する所の鬼趣圖一卷、棲臺甫て竟り、題翰已に多し。(1)

墓志銘というのは故人の一生と業績を顕彰する文である。そこに前述のようなことを記すということは、羅聘の見鬼としての能力は事実であり、それは特技として認知されていたということであろう。また、羅聘の詩集である『香葉草堂詩存』の序文の後に羅聘の肖像画があり、その次の頁に画贊が記されている。画家である蔣宝齡の贊を高時頤が書したもので、見鬼に関する部分を抄出してみる。

生まれながらにして異相を具へ、碧眼雙睛、鬼物を洞見するも、白晝驚かず、藝を挟みて北上し、名は公卿に聞こゆ。(2)

これを見ると、羅聘のこの能力は当時の士林の間でも評判であったことが理解できる。前述したように、澤田氏はこの能力のこ

と記録した志怪書を指摘しているが、本稿も氏の指摘する所の書物より、羅聘の見鬼の能力を確認していく。

先ず羅聘と直接交友関係があった袁枚の『子不語』から引用する。『子不語』巻十四「鬼怕冷淡」に記された話。

揚州の羅兩峰自ら能く鬼を見ると言ふ。毎に日落ちれば、則ち滿路皆鬼にして、富貴の家尤も多し。大概は人に比べて短きこと數尺、面目甚しくは辨ずべからず、但だ黒氣數段、旁行斜立し、呢呢絮語するを見るのみ。氣の暖かなるを喜み、人の旺處なれば則ち聚りて居ること、逐水草なる者の如く然り。揚子雲曰く、「高明の家は、鬼其の室を瞰める」と、言殊に理有り。鬼は墻壁窗板に逢へば、皆直ちに穿ちて過ぎ、礙げ有るを覺えず。人と兩ら相關せざるも、亦全く妨ぐ所無し。一ら面目を見はすは、則ち是冤を報じ祟りを作さんとする者なり。貧苦寥落の家、鬼の往来せる者甚だ少なきは、其の氣衰へ地寒きを以て、鬼も亦此の冷淡に甘んずる能はざるが故なり。諺に云ふ「得るに窮すれば鬼も門に上らず」と、信なるかな。(3)

続いて、同書同巻の「鬼避人如人避烟」も羅聘の談話を採録している。

兩峰云ふ、鬼の人を避くは人の烟を避くるが如し、其の氣厭ふべきを以て之を避く、并に其の人爲るを知らずして之を避くるなり。然れども往々にして急走の人横衝して過ぎるを被れば、則ち散じて數段と爲り、團湊するは一たび茶を熱する時を須ち、方に能く完全なる一鬼たる、其の光景は頗る吃力するに似たり。(4)

紀昀の『閱微草堂筆記』「灤陽消夏錄」二に採録された、羅聘の談話は以下の如し、

揚州の羅兩峰、目に能く鬼を視る、曰く、凡そ人の有る處皆鬼有り、其の横亡せし厲鬼の多年沈滞せる者は、率むね幽房空宅の中に在り、是近づくべからず。近づけば則ち害を爲す。其の憧憧として往來するの鬼、午前は陽盛んなれば、多く牆の陰に在り。午後は陰盛んなれば、則ち四散流行し、以て壁を穿ちて過ぎ、門戸に由らず。人に遇へば則ち路を避くは、陽氣を畏れるなり。是隨處に之有るも、害を爲さず。又曰く、鬼の聚集する所は、恒に人烟密簇の處に在り。僻地曠野は、見る所殊に稀なり。厨灶に圍繞するは、食氣に近づかんと欲するに似たり。又喜んで溷廁に入るは、則ち其の故を明にすること莫し、或は人跡を取りて罕に到るや(5)

また、『閱微草堂筆記』「灤陽統録」には能く鬼を見る者として、羅聘の他に胡中丞太初・恒閣学蘭台の名が挙げられている。(6) 錢泳の『履園叢話』卷十五には「淨眼」という項目があり、そこにも羅聘の談話が記録されている。

揚州の羅兩峰自ら淨眼にして能く鬼物を見ると言ふ、獨り夜間のみならず、毎日惟だ午時のみ蹟を絶つのみにして、餘時は皆鬼有り。或は街市の中に隱躍し、或は叢人の内に雜處す。千態萬狀、枚擧すべからず。(中略) 乾隆壬子の歲、余京師に遊び、兩峰に晤ひ、輒ち喜んで其の鬼を説くを聽く。玉河橋の翰林院衙門の傍らに在りて、金甲神二、長さ丈餘なるを見る。焦山の松寥閣前に一鬼を見る、長さ三・四丈、偏身綠色、眼中出血し、口中火を吐く、或は此れ江魍と曰ふなりと言ふ。一日、友人の夜宴に留まること有り、窗推し出て溺る、一鬼倉卒にして避け難し、影溺るるに随い穿たる、狀殊に憐れむべし。又松江の胡中丞寶泉も、亦淨眼。嘗て清晨屬員を見るに、兩鬼の前に在りて、横に窗檻に座すこと有り、中丞呼びて之を止め、以て此の員に告ぐ。聞く者驚駭せざるは莫きも、中丞は怡び笑ふこと自若たり。吳蔗鄉、名は鳴捷、安徽歙縣の人。嘉慶辛酉の進士、出て陝西咸陽の令と爲る。能く白日鬼を見る、毎日見る所の者は數萬を以て計へ、鬼は人より多きに似たり。一日、兩鬼有りて道を争ふを見る。適々一醉漢

跟蹤として来る。一鬼避けんとするも及ばず、身爲に粉砕さる、一鬼拍手大笑す。之より頃くして、又一人來りて碰ること有り、笑ふ者碎裂すること前の如し、碎かる鬼も亦拍手大笑す。此の兩鬼を看れば、情狀最も妙なり。蔗薤親く自ら之を言ふ⁷。

以上、各書、羅聘の談話を記した部分を見てきたが、羅聘の目撃した所の鬼の様子は、ある特徴があるといえる。要約すれば①鬼は世の中に満ち溢れていること、②鬼は烟の如き存在であり、墻壁等は通過できること、③鬼は人の多い所や、富貴の家を好むこと、④横死した鬼は祟ること⑤普段鬼は人を避けるが、人と衝突した場合は碎けてしまい、もとの姿にもどるには時間がかかること等である。

羅聘の談話はまとまった怪談ではなく、自己の目撃した鬼の有様を淡々と語っているに過ぎない。また記録した各書の取材は次期・場所は相違するものの、内容は大きく矛盾してはいない。特に『履園叢話』に記録される、別の見鬼である呉蔗薤の談話は前述した羅聘の語る鬼の特徴⑤と、合致する部分が多く興味深いものがある。

さて、これまで見てきたものは、袁枚・紀昀・錢泳等の著作に記録されたもので、羅聘に取材して記されたものである。では、羅聘自身はこの能力について如何に考えていたのであろうか。こ

の点については、『香葉草堂詩存』に「秋夜黃瘦石の齋中に集い鬼を説く」という詩がある。

秋室孤燈昏く 書棚饑鼠を墮す 狂鬼人無きが若く 擲掄して三五に來る 我豈に慧眼を具へんや 惡趣偏に能く觀る
頸或は曲がり且高く 身或は短くして儂 齒露はれて瓠中の犀なるも 指或は大きくして股の如し 風は捲く一院の陰
倏忽として堂廡より遠ざかる 悄然として潛蹤を尋ねるも
落葉の聲雨の如し 反りて覺ゆ恐怖の生じ 肉上寒毛の豎つを 之に因りて阮瞻の 終に鬼の侮る所と爲るを嘆く 妄聽すれば且に君に憑かんとす 我が語は妄語に非ず⁸。

この詩をみると、羅聘自身が鬼に対して如何に考えていたかが理解できる。先ず詩題をみてみると、「説鬼」は怪談という意味であり、「集う」と記していることから、「秋の夜黃瘦石の書齋に集まり、怪談会をした」という意味になる。黃瘦石という人物については未詳であるが、羅聘は当時このような怪談会の場によく招かれることがあったのであろうか。

次に詩の重要な部分から検討していくと、五・六句目の「我豈具慧眼、惡趣偏能觀」の語句が羅聘の見鬼としての能力の特徴を示していると考えられる。「慧眼」は真理を見抜く眼力、「惡趣」は悪行を行った衆生の墮ちる世界、つまり地獄のような世界を指

す。従って「私がどうして真理を見抜く眼力なんか持つていようか、地獄のような世界ばかり、ひたすらよく見える」というような訳になる。この詩句から羅聘が見鬼としてみた世界は、神仏が居るような神々しい世界ではなく、地獄に堕ちるような悪霊・怨霊の類が巢食う世界だったようである。

では、羅聘が目撃した者達は如何なる形状であつたのか。それが七・八・九・十句目に「頸或曲且高、身或短而僂、齒露瓠中犀、指或大如股」というように記される。それは「頸が曲がつていて背が高い者や、体は低くて背骨が曲がつている者、齒並びは美人のように良いが、指が太腿のように巨大な者」というような形状であり、かなり醜悪な姿であつたことがわかる。体の一部分が肥大化したような形は『鬼趣図』でも描かれており、ここに文字による記録と絵画との類似点が見られる。

最後の十九・二十句は「妄聽且憑君、我語非妄語」とある。「妄聽」はいい加減に聞くの意であり、「憑」は憑依するということであろう。「妄語」は虚言のことを意味する。おそらく、「私の話をいい加減な気持ちで聞いていると、あなたに霊が憑依することになりますよ。私の話は断じて嘘ではないのだから」というような訳になるであろう。

黄瘦石の書斎で、羅聘が具体的にどのようなことを語つたのかは不明であるが、この詩をみれば、羅聘自身は自己の見鬼としての能力に絶大な自負心があつたことがうかがえる。

以上、志怪書・随筆等に記された羅聘と自身の詩をみていくと、羅聘の見鬼としての実力は自他ともに認めるものであり、その能力は当時高い評価を受けていたことが理解できよう。

二、『鬼趣図』は風刺画なのか

羅聘の事績を語る上で、必ずといっていいほど言及される作品が『鬼趣図』であろう。この絵画については、前述した呉錫麒の『羅兩峰墓志銘』も記され、『清稗類抄』にも以下のようにいう。

揚州の羅兩峰布衣にして聘せられ杭州の金壽門の弟子と爲る。畫を能くし、尤も梅に工みなり。生まれながらにして異稟有り、目に鬼物を見る。久しくして鬼趣圖を成す、殊に形異状にして、宛然として呉道子の地獄變相、又五王・樓炭經を讀むが如きなり。(9)

ここで『鬼趣図』は呉道子の『地獄変相図』と同列に記されているが、世間一般に目にする所の図は地獄絵等とは趣を異にする。ただし『鬼趣図』は『清史稿』に「又鬼趣圖を畫くも、一本ならず」(10)とあり、また莊申氏の「羅聘與其鬼趣図」という論文においても『鬼趣図』には「霍宝樹藏の分段本・劉作壽藏の連続本・アメリカの方聞藏の摺扇本」三種類あることが報告されてい

る。①しかし、それらはいずれも「変相図」に類似したものはなさそうである。『清稗類抄』に記されていたのは、また別の『鬼趣図』であつたのであうか。今となつては具体的なことは不明である。

また、莊申氏は『鬼趣図』のような絵画を、中国絵画史上の伝統的ジャンルであると位置づけ、宋末元初の画家、龔開の「中山出遊図」の流れをくむ社会風刺画の一種とし、更に蒲松齡の『聊齋志異』の影響もあつたのではないかと推測している。②つまり莊申氏は『鬼趣図』の中の奇妙な図は、羅聘が人間社会を風刺したものとするのである。果たしてそうであろうか。そこでこの点について検討していく。

本章で取り上げるのは、巷間に流布している霍宝樹氏藏の『鬼趣図』（以下、『鬼趣図』という場合は、主として霍氏藏『鬼趣図』所謂霍氏本を指す）で、開發股份有限公司印行本を用いる。前述した莊氏の論文によれば『鬼趣図』は乾隆三十七年壬辰（一七七二）の中元節の題辭が最も古く、従つてその成立は乾隆三十七年の中元節以前頃と推定している。また莊氏は『鬼趣図』完成以後、北京と江南の名士達の題詠が極めて多いことから、乾隆四十四年、五十九年の上京時にも携行し『鬼趣図』の知名度は高まつていったという。③確かに莊氏の言の如く『鬼趣図』の題詠は頗る多い、北京・江南の著名な学者や文人墨客が名を連ねているのは、羅聘が『鬼趣図』を携行し各地で披露したためであろう。

更に莊氏は『鬼趣図』における重要な点を指摘する。それは『鬼趣図』には署款・鈐印等がなく、また、八幅の絵画の寸法も各々異なっている点であり、通常の羅聘の作品とは相違する部分があるためである。莊氏はこれらの理由から霍氏本『鬼趣図』は画稿であると断定している。④しかし、開發股份有限公司印行『鬼趣図』はその「弁言」において、羅聘自身がこの絵画に朝野の名流の題跋を求めているため画稿ではないとしている。⑤これらの主張に対して筆者は門外漢であるため判断すべき能力はない。ただし画稿か否かの問題は置いておくとしても、『鬼趣図』といえは所謂霍氏本『鬼趣図』指している当時の文献も存在する。

それは世代としてはややずれるがほぼ同時期といえる、舒位（一七五八〜一八一五）の『瓶水齋詩集』である。その巻十六に「題羅兩峰鬼趣図」⑥という詩があり、八幅の全てに如何なる内容の絵画かが、理解できるタイトルを付している。以下そのタイトルを列挙してみる。

第一幅 一鬼碩一鬼半身

第二幅 一鬼鮮衣科頭、一鬼奴赤体著帽相隨

第三幅 男女二鬼相諶、旁立無常使者

第四幅 一鬼植杖而坐、一鬼以巨觥進酒

第五幅 一巨鬼長身綠毛口眼歎血、兩峰於焦山僧舍見之

第六幅 一鬼長頭鞠躬、二鬼驚避之

第七幅 羣鬼冒雨驚走、一鬼長傘蔽之傘甚破

第八幅 背仰面髑髏

これに各々詩が付しているわけであるが、この配列と八幅の絵画の内容は霍氏本であることは明瞭である。つまり、当時から霍氏が画稿であるかどうかはさておき、『鬼趣図』として認定されていたことの証左となる。従って多くの人士が鑑賞した『鬼趣図』は霍氏本であると断定して間違いないであろう。注目すべきは第五幅の記述に「兩峰焦山の僧舎の於いて之を見る」とあることである。これは羅聘が目撃したものを描いた絵画であるとしている。

さて、次にこの『鬼趣図』を見た人士の感想であるが、現存の『鬼趣図』には夥しい数の題詠・題跋が書き込まれているため、以下、代表的人物の文献・題詠のみを二・三取り上げていくことにする。

そこで、先に引用した紀昀の『閱微草堂筆記』「灤陽消夏録」二の話の続きを見てみる。

畫く所に鬼趣圖有り。頗る其の意を以て造作するを疑ふ、中一鬼有り。首身より大、幾十倍なるは、尤も幻妄に似たり。然れども聞く先の姚安公言ふ、瑤涇の陳公嘗て夏夜窗挂りて臥す、窗の廣さ一丈、忽ち一巨面窗を窺ふ。潤さ窗と等し、其の身の何處に在るかを知らず。急ぎ劍を擧げて其の左目を刺す。手に應じて没す。窗に對する一老僕も亦之を見て、窗下の地中より湧出すと云ふ。地を掘ること丈餘、睹る所無くして止む。是れ果たしてこの種の鬼有り。茫茫昧昧は、吾烏乎ぞ之を質さんや。¹⁷⁾

これは主に『鬼趣図』第六幅に対するコメントであるが、前述した澤田氏は紀昀が『鬼趣図』に寄せた感想として、右の文章の二行目、「尤も幻妄に似たり」までを引用し、「あまり幽鬼の実態であるとは信じていない口吻である」¹⁸⁾とし、紀昀が『鬼趣図』の信憑性に対して疑義を呈しているように解釈している。しかし、右の文章はそこで話は終わってはいない、引用したごく話は「然れども」と継続するのである。以下、話は亡父・姚安公より聞いたものであり、瑤涇の陳公が夏の夜に遭遇した、顔が一丈ほどもある化け物の話である。この話の最後に紀昀は「是れ果たしてこ

の種の鬼有り。茫茫昧昧は、吾烏乎ぞ之を質さんや」と述べる。つまり、「やはりこのような巨大な頭部をもつ鬼は存在する。茫昧としたものは、どうして確認することができようか」といつているのである。要するに紀昀は『鬼趣図』に関しては期待していたものとは相違しているが、姚安公より聞いた話を傍証として、これを鬼の実態を写したものではないかと考えているのである。

紀昀の文集にも「題羅兩峰鬼趣図」という詩がある。この詩は霍氏本の題詠には「兩峰先生以所作鬼趣図索詩戲題十二韻」と記されており、羅聘が紀昀に詩を求めたことがわかる。

文士は例として奇を好み 八極旁く驚せんと思ふ 萬象心に
 雕鏤し 抉摘して丘墓に到る 柴桑は高尚の人 冲澹にして
 遺塵を慮る 其の搜神を續くるに及び 乃ち幽明の故を論ず
 (淵明搜神後記を作りて、以て干寶の書に續く) 豈に神姦
 を圖きて 將に以て禁禦に資せんと曰はんや 平生孤迥を意
 ひ 幽興聊か茲に寓す 畫くに比び誰が作る所ぞ、陰風絹素
 に生じ 惨淡たり有無の中 睽睽吁怖るべし 大いなるかな
 天地の間 變態具はらざるはなし 耳目の未だ經ざる所 安
 ぞ基数を窮めざるを得んや 儒生は真妄を辨ず 色を正して
 章句を授くも 臯比の人に謝するを爲し 鬼を説くも亦趣多
 し⁽¹⁹⁾

最後に「爲謝臯比人、説鬼亦多趣」と述べる所などは、鬼話を愛好した紀昀の面目躍如の感がある。

次に袁枚の「題兩峰鬼趣図」三首を見てみる。

我鬼怪の書を纂し 號して子不語と称す 君の鬼を畫くの圖
 を見て 方に鬼の許の如きを知る 此の趣を得る者は誰ぞ、
 其れ惟だ吾と汝とのみ

女を畫くは必ず須らく美なるべし 美ならずんば情生ぜず
 鬼を畫くは必ず須らく醜なるべし 醜ならずんば人驚かず
 美醜相輪回し 造化は即ち丹青たり

鬼死せば化して聲と爲り 鴉鳴國中に在り 君盍ぞ兼ねて之
 を畫かざる 鬼に比して更に當に怪なるべし 君曰く姑く徐
 徐たり 尚ほ隔たるも兩ながら界を重ぬ⁽²⁰⁾

袁枚と羅聘は直接交友関係にあつたことは前述した。その親密な関係から袁枚はこの三首の詩を羅聘に贈つたのであろう。一首目で袁枚は自著、『子不語』に言及し、羅聘の『鬼趣図』をみて鬼の有様を知つたと述べ、本当に鬼を理解しているのは己と羅聘だけであろうという。二首目は鬼は醜く画くべきことを述べる。

三首目は羅聘に次に画くべきテーマを慫慂する。中国では鬼が死んだ場合聾になるといい、そして聾は鴉鳴国に行くことになる。この鴉鳴国のことは『太平御覧』巻第三百八十四「許琛」に見え、また袁枚自身の『子不語』巻三「城隍殺鬼不許為聾」にも出てくる。袁枚は聾が如何なる者であるのか興味があつたのであろう。それに対する羅聘の答えは「君曰姑徐徐、尚隔兩重界」というものであつた。「徐徐」は静か・緩やか・落ち着く等の意味である。従つて「しばらく休憩する」というような意味であらうか。次の句は少々難解である。一応「尚ほ隔たるも両ながら界を重ぬ」と訓読して「鬼の世界と聾の世界は違うものであるが、似たような世界である」の意に解してみたが妥当であらうか、識者の批正を俟つことにしたい。

以上、羅聘と同時期の『鬼趣図』に対する評価の主だったものを概観してきたが、当時は一般的に鬼の存在を信じている者の方が大勢を占めていた。従つてこの絵画を社会風刺画と捉える思考自体乏しかったであらう。結果、『鬼趣図』は見鬼・羅聘が鬼の実態を活写したものと捉えられることが多かつたと考えられる。これを風刺画と捉える見方は、やはり、近現代人的発想を以てこの絵を解釈した場合にそのような捉え方をせざるをえなくなるのであろう。

三、羅聘の思想

本章では羅聘の思想を検討していくことにしたい。「墓志銘」にはその思想の一端を窺わせる「君夙に禪理に耽り、悉く竺墳を究む」²¹という記述があり、禅学や仏典を好んだとある。要するに羅聘の思想は仏教が主軸をしめているという。

羅聘の著作としては『我信録』があげられる。これまで『我信録』は王毓雯氏の「蒋士銓『藏園九種曲』における鬼神観について」²²という論文に多少言及されているが、当然この論文の主旨からはずれるため、その内容は詳細に検討されてはいない。『我信録』については「墓志銘」に以下のように記す。

又正信録の諸書有り、多く前言を識し、時に新藻を呈す。類は皆怪奇偉麗、鏗として人間に耀く、惜しむ所は緝柳勤むと雖も、編蒲未だ竟へずして、能く寫定する莫きなり。²³

ここでは『正信録』と記しているが、恐らく『我信録』の誤記だと考えられる。この書については羅聘の生前には出版されることはなかった。自序に「乾隆五十六年、歳辛亥に在り。衣雲道人羅聘京師琉璃廠の僧舎に書す」²⁴とあるが、その上梓はかなり後の清末の宣統元年のことであり、徐乃昌輯『懷函雜俎』に所収されている。封面裏に「宣統元年南陵徐乃昌据羅兩峰先生原稿校

刻」と篆書で記されており、巻末にも同文が記される。

その編目をみると上巻「世界・成住壞空・山河大地・天宮・天堂・地獄・閻王・輪廻・軛畜・鬼神・鬼・恠・魔・人身難得・前身後身」、下巻「儒釈同源・性理之説本自寿涯東林二禪師・宋儒多從禪学中來・源道・名言・儒書仏法同旨・仏法是平常心・人心本有内典・悪道不可墮・知行・懺悔・回向・看話頭・持咒・念仏」という構成になっている。

その内容はいうまでもないが、編目の単語をみても分かるように、全体的に仏教と理学（宋学）色が強い。それは次の自序の文をみれば明瞭である。

近ごろ予心性の學に従事す。經藏中と儒書より採輯して、心の言を融會し、彙めて是の書を成し、名づけて我信録と曰ふ。儒・釋の道は正しくして、當に世智辨聰を以て分別執を起すべからざるなり。²⁵⁾

これを以てすれば『我信録』の目的は仏教と理学の融合にあることが理解できる。紙幅の関係上今回は見鬼としての羅聘に関する部分のみをみていくことにする。先ず「鬼」という項目において、羅聘は次のように述べる。

禮經に云ふ人死すれば鬼と曰ふ、と。是れ必ず此の類有るこ

と明らかにして、後此れを以て之に加ふ。然らざれば死は則ち死のみ。業既に虚無と化さば、又何爲ぞ此の名色を立てんや。孔子曰く祭れば則ち鬼之を享く、と。是れ必ず此の物有ることを明らかにして、後享の一字を以て之に加ふ。然らざれば祭るは則ち祭るのみ。何爲ぞ饌を設ける者有りて即ち饌に來る者有らんや。蔡沈書經の注に云ふ、商の俗は鬼を尚ぶ、と。鬼無からしむれば、俗何を以て尚ばん。陳澧禮經の注に云ふ、郷人禘す。禘とは強鬼の名なり、と。鬼無らしむれば強何を以て名とせん。鬼の火は燐と曰ふ。苟も鬼無くんば燐の字作れるは何ぞ解せん。（中略）釋門の説く所の餓鬼各々種類六十四有り、惟ふに人知の悉に至る。故に之を區分すること詳らかなり。若し無形・無體と謂はば、何に従りて餓えるを得んや²⁶⁾

このように羅聘は經書・仏典等から鬼の實在を強く主張し、無鬼の論を批判しており、また、無鬼の論を是とするのであれば、無理解し難いことも生じるとして次のように述べる。

毎歲各畿・省・郡・縣の清明節の七月望・十月朔の如きは、城隍神にて厲壇に臨み、錢糧正額を破費すること若干。我が國家又何を以て此の無益の事を行はんや²⁷⁾

つまり、国家・郡・県が祭祀を怠らざる理由は、鬼が存在する故であり、無鬼であれば祭祀は全くの無駄ということになると主張する。

次に「怪」という項目をみてみる。

子は怪を語らざるも、怪無きに非るなり。但だ語らざるのみ。語れば則ち人の惶惑を啓き、人の聰明を亂し、人をして經常を敗りて悠謬に務めしむ。(28)

羅聘は孔子が怪を語らなかつた理由をこのように述べる。要するに羅聘の解釈によると「孔子は、怪自体は存在するが、単にそれを語らなかつただけである。怪を語るにより、人々の日常の生活が混乱することを避けたのだ」とする。そして「禿頰・敵帚・破缶・敗甌皆靈を露はし崇りを作す」(29)と述べ、日本の付喪神と同様、日常の生活道具の類も古くなれば怪を起こすとしている。

「魔」という項目においては、羅聘自身が聞いた以下のようなエピソードを記している。

僧有りて余に向かいて云ふ、終南山は最も居住し難きも、周圍廣き千里、地有りて耕すべく、植えるべし。聽きて修者、鋤を荷いて深く入る。但だ怪の來ること甚だ多し、白晝・昏

夜を論ずる無し。形質奇異なる者有り、妹女美倩なる者有り。即ち父兄、朋友、妻子に化成し來り、相勸戒せる者有り、只だ是の一味は理あらず、萬事俱に休み、稍く一語を出して、一念を動かさば、渠に着きて祟る。蓋し深山は無人にして、頑石・枯椿、萬年の日精・月華を受けて、遂に此れ等を成す、然れども亦小醜のみ。有道者に禍を爲す能はざるなり。(30)

この話も年を経た石や木が人に害をなすという点で、前項の「怪」と類似した部分がある。羅聘のいう魔とは、主に仏道修行者の妨害をする存在であり、それを避ける法として「又止觀に云ふ、若し諸魔の障りて座禪の行者を惱亂すれば、當に大乘方等の教中の諸魔を治むる咒を誦するべし」(31)など仏書を引用し、咒や陀羅尼を用いることを述べている。

仏教信者である羅聘は「前身」の項において自身の前世を以下のように述べる。

人有りて笑ひて余に問ふて曰く、君、能く自ら前身は花之寺の僧爲るを知るや。恐らくは妄語のみ。吾は則ち敢えて信ぜず、と。余曰く、月明の蕭寺花之を夢む、前身は花之寺の僧爲り。我に同じ者、且つ必ずしも稽古以來を論ぜず、諸書に説く所は、馮京の前身は五臺山の僧爲り、張方平の前身は瑯琊寺の僧爲り……(32)

この逸話は当時から有名であった。したがって「墓志銘」にも次のように記されている。

嘗て夢に一招提に入り、榜に花之寺と曰ふ、前生は即ち其の主僧たるを髣髴とす。後遂に花之寺の僧と號し、印に鐫りて之を識す⁽³³⁾

羅聘は自分の前世を「花之寺の僧」であると確信して、印に刻んでいる。これは現在羅聘の印譜等でも確認できる。⁽³⁴⁾

『我信録』の内容については仏教の教義が中心であることは前述した。特に羅聘が帰依した宗派は禪宗といわれる。「墓志銘」に「君夙に禪の理に耽り、悉く竺墳を究め、一喝して人を醒ます⁽³⁵⁾」とある。当然『我信録』にも「儒釋同源」・「宋儒は多く禪學中より来る」という項目が設けられており、特に理学と禪学の一致を強調している。しかし、羅聘の仏教学への関心は禪学だけではなかつたようである。『我信録』の最後の項目に「念仏」とある。この項をみると次のように記している。

出離・生死・輪廻は、只だ參禪・念仏の兩門に有り。參禪とは、自心を參ずるの禪なり。無始・夙垢・豁開・原初・寶鏡を掀翻して、純白を以て純白に還し、明德を以て明德に還すに過

ざるのみ。羣生の惘惘たるを奈せん。此の第一義諦を知らず。是を以て又下根の人の爲に、巧みに方便を設け、念佛して淨土に往生せしめ、心口もて略功夫を用ひ、便ち不退轉の地に登らしむ。不退轉とは、永く淪墮せざるなり。但に淪墮せざるのみならず、且つ無窮の快樂を享く。苟も名號を執持すれば、即ち業を帶ぶる凡夫、皆攝受を得ん。專屬して下根の人に接すと謂はんや。實に是れ上中下の三根普く被るをしらず。文殊・普賢の諸大菩薩を以て皆欲生するは此の故なり。馬鳴・龍樹の宗門の諸大菩薩を以て皆欲生するは此の故なり。⁽³⁶⁾

これを見ると羅聘は禪宗の教えは所詮自力本願であり、自己の救済にしかならないとしている。つまり、「羣生の惘惘」という状況に対しては禪は無効であり、とても対峙できないとする。そこで衆生を救済する教えとして有効であるのが、念仏淨土の教えであるという。しかも淨土の教えは「下根の人」のみに対して説かれたものではなく、すべての衆生を救済するものであるという。

其の根要を究めれば、口中喃喃の六字に過ぎず。豈に至易至簡ならずや。勸門・修門のの種々の諸方便修し、皆還元の路有と雖も、然れども終に淨土一門の奇にして、且つ捷かなるにしかず。緣、上聖に有れば、之に垂手引接を爲す。故に羣生彼岸に登ること極めて易し、是の如きの法、豈に妙法に非

ずや。(37)

結局、羅聘は数ある仏教の宗派の中で、浄土を以て最上のものとしていたことが分かる。要するに他の宗派と比較した場合、その教義が単純であることがその理由であろう。「南無阿弥陀仏」、この六字を唱えるだけで救われる。この教義が多く人に救済を与える点が、羅聘が浄土の教えを最高とし、「豈に妙法に非ずや」という所以である。

おわりに

以上、羅聘の見鬼能力を中心に、『鬼趣図』、『我信録』等を概観してきた。そこからみえてくるものは、当然画家・芸術家としての羅聘ではない、見鬼としての姿である。羅聘は乾隆三十七年頃『鬼趣図』を完成させ、江南の人士に披露して、多くの題詠を求めた。更に同四十四年、五十九年に上京し北京において同図を公開している。これにより羅聘の知名度は上がったことは確かであろう。

特に『鬼趣図』が多くの人々の話題になったのは、羅聘が見鬼であるという評判を伴ったためであると考えられる。前述したように当時の人々はこれを見鬼が描いた、真の鬼の姿であると考えたためである。それ故『鬼趣図』に社会風刺性を感じるのは現代

人的発想であるといわざるを得ない。

これらのことにより羅聘は見鬼として紀昀・袁枚等から、リアルな鬼の様相についてのインタビューを受けており、その談話が『閱微草堂筆記』・『子不語』に採録されている。その内容は本論でも詳述したように、恐怖を感じるものではないが、奇妙なリアリティーを持っている。したがって多くの人々は羅聘の見た所の者は真であると感じたのではないだろうか、そのため羅聘は「浄眼」の異名を奉られたのであろう。そういう意味では羅聘の見鬼としての能力は(それがたとえ幻視であるとしても)、異色の画家・羅聘の中央での画壇・文壇において高名になるために充分に活用されたと言つていいであろう。

しかし、羅聘のこの能力は多くの巫覡達のように、加持祈祷や除霊のような怪しげ儀式を行い法外な金銭を得るといふ類とは一線を画するものであった。記録にある羅聘の談話はあくまでも鬼を見るのみであり、それ以上の事が記されていることはない。つまり、羅聘はある意味画家の目を以て鬼を見ており、それが『鬼趣図』に結晶されていたのではないだろうか。

そして、羅聘が仏教或は仏教的世界を篤く信仰していたのは、見鬼という特殊な能力を以て死後の世界を考察した場合、来世への解答を与えてくれるものであったためかもしれない。

注

- (1) 吳錫麒『有正味齋駢体文』卷二十三 四葉 嘉慶十三年序刊「眼有慧光、洞知鬼物煩冤地下。開變相之圖、有美山阿、寫離騷之狀。所製鬼趣圖一卷、棲毫甫竟、題翰已多」
- (2) 羅聘『香葉草堂詩存』序 六葉 上海聚珍仿宋印書局一九一八年「生具異相、碧眼雙睛、洞見鬼物、不驚白晝、挾藝北上、名聞公卿」
- (3) 袁枚 王英志主編『袁枚全集』肆 二七六頁 江蘇古積出版 一九九三年「揚州羅兩峰自言能見鬼。每日落則滿路皆鬼、富貴家尤多。大概比人短數尺、面目不甚可辨、但見黑氣數段、旁行斜立、呢呢絮語。喜氣暖、人旺處則聚而居、如逐水草者然。揚子雲曰高明之家、鬼瞰其室、言殊有理。鬼逢牆壁窗板、皆直穿而過、不覺有礙。與人兩不相關、亦全無所妨。一見面目、則是報冤作祟者矣。貧苦寥落之家、鬼往來者甚少、以其氣衰地寒、鬼亦不能甘此冷淡故。諺云、窮得鬼不上門、信矣」
- (4) 袁枚 前掲書 二七七頁「兩峰云、鬼避人如人之避烟、以其氣可厭而避之、并不知其爲人而避之也。然往々被急走之人橫衝而過、則散爲數段、須團湊一熱茶時、方能完全一鬼、其光景似頗吃力」
- (5) 紀昀『閱微草堂筆記 會校會注會評』七六頁 鳳凰出版社
- 二〇一二年「揚州羅兩峰、目能視鬼、曰、凡有人處皆有鬼、其橫亡厲鬼多年沈滯者、率在幽房空宅中、是不可近。近則爲害。其懂懂往來鬼、午前陽盛、多在牆陰。午後陰盛、則四散流行、可以穿壁而過、不由門戶。遇人則避路、畏陽氣也。是隨處有之、不爲害。又曰、鬼所聚集、恒在人烟密簇處、僻地曠野は、所見殊稀。圍繞厨灶、似欲近食氣。又喜入溷廁、則莫明其故、或取人跡罕到」
- (6) 紀昀 前掲書 九五三頁
- (7) 錢永『履園叢話』四〇六、四〇七頁 中華書局 一九九七年「揚州羅兩峰自言淨眼能見鬼物、不獨夜間、每日惟午時絕蹟、餘時皆有鬼。或隱躍於街市之中、或雜處於叢人之內。千態萬狀、不可枚舉。(中略)乾隆壬子の歲、余遊京師、晤兩峰、輒喜聽其鬼說。言在玉河橋翰林院衙門傍、見金甲神二、長丈餘。焦山松寥閣前見一鬼、長三・四丈、偏身綠色、眼中出血、口中吐火、或曰此江魃也。一日、有友人留夜宴、推窗出溺、一鬼倉卒難避、影隨溺穿、狀殊可憐。又松江湖中丞寶泉、亦淨眼。嘗見清晨屬員、有兩鬼在前、橫座於窗檻、中丞呼止之、以告此員。聞者莫不驚駭、而中丞怡笑自若。吳蔗鄉、名鳴捷、安徽歙縣人。嘉慶辛酉進士、出爲陝西咸陽令。能白日見鬼、每日所見者以數萬計、似鬼多於人。一日、見有兩鬼爭道。適一醉漢踉蹌而來。一鬼避不及、身爲粉碎、一鬼拍手大。頃之、又有一人來碰、笑者碎裂如前、碎鬼亦

- 拍手大笑。看此兩鬼、情狀最妙。蔗薺親自言之」
- (8) 羅聘『香葉草堂詩存』十一葉 「秋室昏孤燈 書棚墮饑鼠
狂鬼若無人 挪揄來三五 我豈具慧眼 惡趣偏能覩 頸
或曲且高 身或短而僂 齒露瓠中犀 指或大如股 風捲一
院陰 倏忽遠堂廡 悄然尋潛蹤 落葉聲如雨 反覺恐怖生
肉上寒毛豎 因之歎阮瞻 終爲鬼所侮 妄聽且憑君 我
語是非妄語」
- (9) 徐珂編『清稗類抄』九冊 四〇六九頁 二〇〇三年 「揚
州羅兩峰布衣聘爲杭州金壽門弟子。能畫、尤工梅。生有異
稟目見鬼物。久之成鬼趣圖、殊形異狀、宛然異道子地獄變相、
又如讀五王・樓炭經」
- (10) 趙爾巽等撰『清史稿』四六冊 一三九一五頁
- (11) 莊申「羅聘與其鬼趣圖」『中央歷史言語研究所集刊』10期
所收 四二二頁 一九七二年
- (12) 莊申 前掲書 四一九〜四二一頁
- (13) 莊申 前掲書 四三〇頁
- (14) 莊申 前掲書 四二九頁
- (15) 『羅聘鬼趣圖』三葉 開発股份有限公司 一九七〇年
- (16) 舒位『瓶水齋詩集』卷十六 六五七〜六六〇頁 上海古籍
出版 一九九一年
- (17) 紀昀 前掲書 七六頁 「所畫有鬼趣圖。頗疑其以意造作、
中有一鬼、首大於身、幾十倍、尤似幻妄。然聞先姚安公言、
- 瑤涇陳公嘗夏夜挂窗臥、窗廣一丈、忽一巨面窺窗。潤與窗等、
不知其身何處、急掣劍刺其左目。應手沒。對窗一老僕亦
見之、云從窗下地中湧出。掘地丈餘、無所睹止。是果有此
種鬼。茫茫昧昧は、吾烏乎質之」
- (18) 澤田瑞穂『中国の呪法』三四〜三五頁 平河出版社
一九九〇年
- (19) 紀昀『紀文達公遺集』『儒藏』精華編二七五所收 五〇〇
〜五〇一頁 北京大學出版社 二〇一一年
「文士例好奇 八極思旁驚、萬象心雕鏤 抉摘到丘墓 柴桑
高尚人 冲澹遺塵慮 及其續搜神 乃論幽明故 (淵明作搜
神後記、以續干寶之書) 豈曰圖神姦 將以資禁禦 平生意
孤迥 幽興聊茲寓 比畫誰所作、陰風生絹素 慘淡有無中
 談矚吁可怖 大矣天地間 變態靡不具 耳目所未經 安
 得窮基數 儒生辨真妄 正色授章句 爲謝臯比人 說鬼亦
 多趣」
- (20) 袁枚 前掲書 壹 五九〇〜五九一頁
「我纂鬼怪書 號稱子不語 見君畫鬼圖 方鬼知如許 得此
 趣者誰 其惟吾與汝 畫女必須美 不美不情生 畫鬼必須
 醜 不醜不人驚 美醜相輪回 造化即丹青 鬼死化爲甕
 鴉鳴國中在 君盍兼畫之 比鬼更當怪 君曰姑徐徐 尚隔
 兩重界」
- (21) 吳錫麒 前掲書 五葉

- (22) 王毓雯 「蔣士銓『藏園九種曲』における鬼神観について」
『中国文学論集』第二十九号所収 六一頁〜六二頁 九州大
学中国文学会 二〇〇〇年
- (23) 吳錫麒 前掲書 五葉 「又有正信錄諸書、多識前言、時呈
新藻。類皆怪奇偉麗、鏗耀人間、所惜緝柳雖勤、編蒲未竟、
莫能寫定」
- (24) 羅聘 『我信錄』上卷 徐乃昌輯『懷園雜俎』所収 序四葉
一九〇九年
- (25) 羅聘 前掲書上卷 序四葉 「近予從事於心性之學。採輯經
藏中與儒書、融會於心之言、彙成是書、名曰我信錄。儒・
釋の道正、不當以世智辨聰起分別執也」
- (26) 羅聘 前掲書上卷 十五葉 「禮經云人死曰鬼。是必明有
此類、後以此加之。不然死則死耳。業既化虛無、又何爲立
此名色。孔子曰祭則鬼享之。是必明有此物、而後以享之一
字加之。不然祭則祭耳。何爲有設饌者、即有來饌者。蔡沈
書經注云、商俗尚鬼、と。使無鬼、俗何以尚。陳澧禮經注
云、鄉人禘。禘者強鬼之名。使無鬼、強何以名。鬼之火曰
燐。苟無鬼燐字作何解。(中略) 釋門所說、餓鬼各々種類有
六十四、惟至人知之悉。故區分之詳。若謂無形・無體、何
從得餓」
- (27) 羅聘 前掲書上卷 十五葉 「如每歲各畿・省・郡・縣清明
節七月望・十月朔、城隍神臨厲壇、破費錢糧正額若干。我
國家又何以行此無益之事」
- (28) 羅聘 前掲書上卷 十六葉 「子不語怪、非無怪。但不語耳。
語則啓人惶惑、亂人聰明、令人敗經常敗務悠謬」
- (29) 羅聘 前掲書上卷 十六葉
- (30) 羅聘 前掲書上卷 十八葉 「有僧向余云、終南山最難居住、
周圍廣千里、有地可耕、可植。聽修者、荷鋤深入。但怪來甚多、
無論白晝、昏夜。有形質奇異者、有妹女美倩者。即化成父兄、
朋友、妻子來、有相勸戒者、只是一味不理、萬事俱休、稍
出一語、動一念、着渠祟矣。蓋深山無人、頑石・枯椿、受
千萬年日精・月華、遂成此等、然亦小醜耳。不能爲有道者
禍也」
- (31) 羅聘 前掲書上卷 十八葉
- (32) 羅聘 前掲書上卷 二十二葉 「有人笑而問余曰、君能自知
前身爲花之寺僧耶。恐妄語耳。吾則不敢信。余曰、月明蕭
寺夢花之、前身爲花之寺僧。同乎我者、且不必論稽古以來、
諸書所說、如馮京前身爲五臺山僧、張方平前身爲瑯琊寺僧
……」
- (33) 吳錫麒 前掲書 五葉 「嘗夢入一招提、榜曰花之寺、髻髯
前生即其主僧。後遂號花之寺僧、鐫印識之」
- (34) 吳玉樸編 『中国書画落款辞典』 六一頁 東京堂出版
一九九三年
- (35) 吳錫麒 前掲書 五葉

(36) 羅聘 『我信錄』下卷 二十葉 「出離・生死・輪廻、只有參禪・

念仏兩門。參禪者、參自心之禪。掀翻無始・夙垢・豁開・

原初・寶鏡、不過以純白還純白、以明德還明德耳。奈羣生

惘惘。不知此第一義諦。是以又爲下根人、巧設方便、念佛

往生淨土、心口も略用功夫、便登不退轉地。不退轉者、永

不淪墮也。不但不淪墮、且享無窮快樂。苟執持名號、即帶

業凡夫、皆得攝受。謂專屬接下根人乎。不知實是上中下三

根普被。以文殊・普賢の諸大菩薩皆欲生此故。以馬鳴・龍

樹宗門諸大菩薩皆欲生此故也」

(37) 羅聘 前掲書 下卷 二十葉 「究其根要、不過口中喃喃々六

字。豈不至易至簡。雖修勸門・修門種々諸方便、皆有還元路、

然終不若淨土一門奇、且捷。緣有上聖、爲之垂手引接。故

羣生登彼岸極易、如是之法、豈非妙法」

Lo ping as a Psychic

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract